

「学び続ける教師」実現への具体的方法論の研究

—UTS 教育研究会の具体的実践を通して—

山下 恭 南埜 猛 小南 浩一

1 研究目的

「学び続ける」教師の原動力は何か。「学ぶ」ことから「学び続ける」ことへのステップには何が必要なのか。UTS 教育研究会の継続的研究実践活動を通じてその要因を探る。また研究会へ参加する教師・学部生・院生の継続的参加を促し研究会への参加が定着する方策をさぐる。

2 研究方法

(1) UTS 教育研究会の性格

平成 27 年度に続き本年度も年間 6 回の研究会を実施した（資料 1）。研究会の内容は教師としての資質の向上を図るために、毎回テーマを設定しできるだけ多くの参加者を募った。関連研究対象分野は教師教育、教科教育法、教科内容論、授業実践、教育相談、学級経営など多岐にわたる。教師の力量には個人差があり、なおかつ得意とする分野にも偏りがみられるのが一般的である。興味を持つ分野も様々である。こうした点を考慮し、できるだけ多くの学部生・院生・現職教員に参加してもらえるように研究会の位置づけを行った。この基本方針は昨年から引き継いでいる。

(2) 研究会の運営方法

UTS 教育研究会の運営については、昨年と同じく現役の学部生・院生に積極的に関わってもらった。単なる参加ではなく、研究会の受付業務などを通じて参画させるよう計画した。押し付けられた研究会ではなく、自分たちの研究会であるという意識を持ってもらいたかったことと、講師の方の実践と学び続ける姿勢を学んでほしいという目的があった。学部生・院生自ら研究会の参加者の募集を行い、さらにその活動報告を兵庫教育大学社会系コース「つながる社会系」HP 内の嬉野会ブログに掲載するという形をとった。学部生・院生の研究会に対する認知度は増し、自分たちの研究会であるという意識は高まった。

研究会の講師の選定にあたっては、昨年度と同様、兵庫教育大学社会系分野の修了生を第一としたが、必要に応じて社会系修了生以外の方にも特別講師をお願いした。また小中高の校種の枠を取払い、どの校種の教師にも参加しやすいように留意した。講師をお願いした方は、いずれも「学び続けている教師」として参加者には見習うべきモデルとなる方である。研究会は兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパスと加東キャンパスの二か所で開催した。神戸ハーバーランドキャンパスでの開催については、参加しやすい環境を整えるために、昨年に引き続き加東キャンパスより、送迎バスの運行を導入し、参加しやす

い様に環境を整えた。

資料 1 平成 28 年度 UTS 教育研究会実施概要

実施日	研究会のテーマ・内容など	関連研究対象分野	会場・(参加者数)
第 7 回 5 月 15 日	講師：学部 6 期：河合健次氏 「南極授業」の実践	小学校教育・授業実践・ 教材研究・社会教育など	K.H.C 講義室 5 (14 名)
第 8 回 7 月 10 日	講師：上出正彦氏「教育現場が求める教師像」	教育原理・教員研修・教師教育・採用情報など	H.K.C 共通講義棟 104 号室 (24 名)
第 9 回 9 月 27 日	講師：福村徳重氏(臨床心理士) 「学校教育とこころの問題」	特別支援教育・学校カウンセリング・学級経営・生徒指導・保護者対応	K.H.C 講義室 5 (9 名)
第 10 回 11 月 27 日	「小中高の授業分析—公民的分野授業の同時体験と研究協議」 言語系：小林豊茂氏 小学校授業実践 院 32 期：箕田心一氏 中学校授業実践 院 25 期：加用拓也氏 高等学校授業実践	小中高の授業比較研究・ 社会科教育内容論、公民教育・教材研究、授業分析・公民科教育法 学部 2 年生参加型研究会	H.K.C 共通講義棟 104 号室 (63 名)
第 11 回 1 月 8 日	講師：院 3 期山下恭氏 「日本史教育の研究—1945 年夏 ソ満国境の街虎頭の住民に起こったこと」	教科内容論・歴史科教育法・日本史教育・教材研究	K.H.C 講義室 4 (9 名)
第 12 回 2 月 26 日	講師：安達一紀氏「ヒストリー・リテラシーを高める発問」	歴史科教育法・世界史教育・教科内容論	K.H.C 兵教ホール (53 名)

(注) K.H.C=神戸ハーバーランドキャンパス H.K.C=兵教大加東キャンパス

(3) 研究会の構成

研究会は昨年度と同様二部構成でおこなわれた。第一部では、講師の方に資料(映像資料含む)を用意してもらい、専門の立場からの研究成果や教育実践の内容を発表してもらった。それを受けて第二部では、参加者の質問を受ける形でフリートークの場を設定した。さらに研究会の終了後講師を交えての交流会を実施した。この形式は研究会のスタイルとして定着している。

(4) アンケートの実施

研究会参加者へ毎回アンケートを実施した。参加者がどのような研究分野あるいは教育実践・分野に関心があるのか、参加動機は何か、また研究会の運営方法についての改善点をさぐった。多くの興味ある結果が浮き彫りになった。

3 研究の成果

(1) 平成 28 年度の UTS 教育研究会の個別報告

平成 27 年度の第 1 回～6 回 UTS 教育研究会のあとを受けて、本年度は第 7 回～12 回の UTS 教育研究会(資料 1)を実施した。以下、本年度実施の研究会について報告する。

①第 7 回 UTS 教育研究会は参加者 14 名。講師は明石市立清水小学校の河合健次先生。南

極の自然の様子、越冬隊の苦労、南極からの授業の準備と実践などを詳細に報告していただいた。映像資料は現地の様子を余すことなく伝えるもので臨場感があった。また南極からの授業につながるそれまでの取り組みについても詳しく報告していただいた。出席者の院生・学部生から多くの質問があり、その実践に至るまでの取組を丁寧にお答えいただいた。

- ②第 8 回 UTS 教育研究会の参加者 24 名。講師は生涯教育センターの上出正彦先生。会場が兵教大加東キャンパスということもあり、教員採用試験を控えた学部 4 年生、院生の参加が目立った。教師としての心構えや学級経営の基本など教壇に立った時に直面する問題など詳細に語っていただいた。講演後の質疑応答では、教師の生徒への接し方や教育実習に行きつらな事など具体的な質問が数多くなされた。
- ③第 9 回 UTS 教育研究会の参加者 9 名。講師は臨床心理士の福村徳重先生。小中学校の児童・生徒のこころの問題を具体的な事例をもとに紹介・解説された。内容は生活指導や学校カウンセリング、学級経営などの分野に深くかかわるもので、これから教師になろうとする多くの学部生や院生に参加してほしかったが参加者が少なく残念であった。
- ④第 10 回 UTS 教育研究会の参加者 63 名。講師は社市立小学校小林豊茂先生・社市立中学校箕田心一先生・神戸市立ポートアイランド高校加用拓也先生ら現職教師 3 名による模擬授業が行われた。具体的には、小・中・高の公民分野の授業を共通テーマ「憲法学習」で実施し、児童・生徒役の兵庫教育大学学部 2 年生に体験してもらった。授業は小中校の特徴がよく表れた素晴らしいものであった。その後研究協議がおこなわれ、授業者と学部生・院生らとの間で質疑応答がおこなわれた。参加者は授業を肌で実感し比較体験することができた。学部 2 年生から授業の進め方や教材の準備など多くの質問が出された。
- ⑤第 11 回 UTS 教育研究会は参加者 9 名。講師は須磨東高等学校山下恭先生。日本史教育内容論。ソ満国境の街、虎頭の住民がソ連参戦の状況下でどのように行動したのかを詳細に報告された。また高等学校の日本史の授業でどのように取り扱えば良いのか授業案を提示された。参加された方は非常に熱心な方ばかりで「国家とは何かということを根源的に考え直すきっかけになった」とアンケートに記された先生もいた。
- ⑥第 12 回 UTS 教育研究会の参加者 53 名。講師は姫路東高校安達一紀先生。世界史授業の実践報告がおこなわれた。日頃から学んでいる歴史について疑問に思うことはないのか常に生徒に問いかけるという。世界史の教科書の表現がある意図のもとに書かれている例を提示しながら、問題点を指摘し生徒に歴史の見方について考えさせる授業実践を報告された。

(2) アンケート調査の結果

① 主な調査項目と集計結果

アンケートの提出は任意のため、研究会の参加者から提出されていない場合も多く、参加者全員のアンケートが回収されたわけではない。以下の考察では、アンケートは昨年度との比較もあり 2 年分の資料を提示する。

1)UTS 教育研究会への参加動機（資料 2 参照）

参加動機については、昨年と同様「指導教官に勧められて」が学部生・院生に最も多い。第 10 回の研究会が集中講義の一環として実施されたという事情にもよる。同じく「研究テーマにひかれて」という参加動機も昨年度と同じ結果となった。魅力的な研究会にするための大きな要素としては、研究テーマが重要なポイントになることが再確認された。「研究会の設立趣旨に賛同」の回答者は継続的に参加されている。

資料 2 研究会参加の動機—2 年間の比較（複数回答可）

平成 27 年度

	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回	6 回	合計
指導教官から勧められて	5	2	1	29	0	7	44
UTS 教育研究会設立趣旨に賛同	3	2	2	2	1	2	12
研究テーマにひかれて	8	6	3	16	4	9	46
UTS 教育研究会の運営委員として	3	2	4	0	2	0	11
知人からの勧めがあつて	0	1	1	0	0	0	2
その他（講師にひかれてなど）	0	2	0	1	0	3	6
合計	19	15	11	48	7	21	121

平成 28 年度

	7 回	8 回	9 回	10 回	11 回	12 回	合計
指導教官から勧められて	1	2	2	43	1	1	50
UTS 教育研究会設立趣旨に賛同	3	1	2	0	2	7	15
研究テーマにひかれて	3	16	4	0	4	18	45
UTS 教育研究会の運営委員として	1	2	2	0	2	1	8
知人からの勧めがあつて	1	1	2	0	1	0	5
その他（講師にひかれてなど）	0	0	0	0	0	2	2
合計	9	22	12	43	10	29	125

2)関心のある教育分野（資料 3 参照）

研究会で取り上げてほしい教育分野は何かという問いについては、すべての回で教科指導分野に関心を持つ学生・一般修了生（現職教員）が最も多かった。学級経営、生徒（生活）指導の順となり、さらに人権教育、部活指導、進路指導と続く。この結果は昨年引き続き同じ傾向が表れた。研究会の参加者が社会系教育分野に所属する学部生・院生やその卒業生・修了生が多く、教科指導に関心が深いのは当然の結果かもしれない。一方で第 4・10 回のアンケート結果に注目したい。アンケートの中心は学部生（2 年生中心）・院生のものがほとんどであるが、教科指導と学級経営に関心が高いことがわかった。

資料 3 研究会で取り上げてほしい教育分野（複数回答可）

平成 27 年度

	1 回	2 回	3 回	4 回	5 回	6 回	合計
学級経営	0	3 (2)	3	24	1	3 (3)	34 (5)
教科指導	7 (1)	7 (6)	7 (1)	35	2	14 (10)	72 (18)

生徒指導	3	3 (3)	2	10	1	1 (1)	20 (4)
部活指導	2	2 (2)	0	3	1	2 (1)	10 (3)
進路指導	1	2 (2)	0	3	0	3	9 (2)
人権教育	1	3 (2)	0	4	2	3	13 (2)
合計	14 (1)	20 (17)	12 (1)	79	7	26 (15)	158 (34)

平成 28 年度

	7回	8回	9回	10回	11回	12回	合計
学級経営	3	3	1	24	1	3 (2)	35 (2)
教科指導	4	12	2	24	2	10 (7)	54 (7)
生徒指導	3	5	2	7	1	3 (1)	21 (1)
部活指導	1	3	1	9	0	5 (1)	19 (1)
進路指導	1	4	2	8	0	2 (1)	17 (1)
人権教育	0	5	3	5	0	1 (3)	14 (3)
合計	12	32	11	77	4	24 (15)	160 (15)

(注) () は一般教員分・大学院修了生

3)社会系教育分野で関心のある学問分野 (資料 4 参照)

アカデミックな分野で最も関心の高い分野 (あるいは学びたい分野) を問うと日本史分野の関心度が際立った。続いて教育法 (社会科教育法、歴史科教育法、地理教育法、公民科教育法含む。) 分野が続いた。世界史、地理、公民分野はほぼ同数だった。教育学 (教育社会学、教育史、カリキュラム論など) の関心度は昨年度に比べて比率を増した。第 4 回第 10 回のアンケート結果は兵教大学部 2 年生の意向を反映しているが、日本史分野と世界史分野とで差ができています。背景には、昨年と同様、高等学校で日本史 B を学んだ学部生が多かったことやセンター試験で日本史 B を選択した者が多かったからだろうと思われる。日本史分野への関心の高さはそれまで高等学校で学んだ知識と興味関心を引き継いでいる。

資料 4 研究会で学びたい学問分野 (複数回答可)

平成 27 年度

	1回	2回	3回	4回	5回	6回	合計
日本史分野	3	2	4 (1)	31	2	10 (6)	52 (7)
世界史分野	2	3 (1)	3 (1)	20	2	4 (2)	34 (4)
地理分野	4	1	6 (1)	15	1	7 (5)	34 (6)
公民分野	2	4 (1)	4	17	2	5 (3)	34 (4)
教育法分野	6	4 (3)	3	26	3	7 (5)	49 (8)
教育学分野	2	1 (1)	1	11	1	4 (4)	20 (5)
合計	19	15 (6)	21 (3)	120	11	37 (25)	223 (34)

平成 28 年度

	7回	8回	9回	10回	11回	12回	合計
日本史分野	4	9	3	27	2	6 (6)	51 (6)

世界史分野	2	7	3	14	2	4 (4)	32 (4)
地理分野	3	8	2	12	1	3 (4)	29 (4)
公民分野	4	6	5	13	1	4 (4)	33 (4)
教育法分野	4	9	0	15	0	4 (7)	32 (7)
教育学分野	2	13	2	10	1	3 (4)	31 (4)
合 計	19	42	15	91	7	24(29)	198(29)

(注) () は一般職員、大学院修了生

(3) アンケート調査結果の分析

①「学び」への関心とその源泉

アンケートの結果から、学部生・院生は教科指導と学級経営に強い関心を示していることがわかった。学部生は学級担任の仕事を強く意識し、また院生は授業での教科指導の大切さを強く認識しているようだ。人権教育、部活指導、進路指導は実際に教壇に立ってから関心が高まる分野なのか、教職経験のない学部生や院生には関心が低い。

②「学び」の環境

1)開催場所と経費

研究会の開催場所は参加者にとって重要な学びの環境である。昨年度も指摘したが、神戸ハーバーランドキャンパスは交通の便が良く、兵庫県下各地より、兵教大の卒業生・修了生ならびに現職の教員が参加しやすい。一方、加東キャンパスでの研究会には学部生・院生の参加者が圧倒的に多かった。神戸ハーバーランドキャンパスは本学のある加東キャンパスから遠く、学部生や院生の参加にはかなりのハンデがあるといわざるを得ない。この問題を解消すべく加東キャンパスよりハーバーランドキャンパスまでバスを運行し参加者の便宜を図ったが、多くの参加者を集めることはできなかった。バスの運行費用を考えると今後さらなる検討が必要である。また逆に卒業生や修了生、現職の教員にとって加東キャンパスに出向くという点は交通費の負担もあり難しいと指摘せざるを得ない。2つの開催場所にはメリットとデメリットがそれぞれあり今後もさらなる検討が必要である。さらに研究会の会場費の問題もある。

2)開催日程

開催日は大切な学びの環境のうちのひとつである。すでに教職にある卒業生や修了生にとって、平日の研究会への参加は難しく、土・日は部活動の活動日と重なる場合も多い。結局のところ日曜日の午後という設定になる。また学校行事の観点から文化祭、体育祭、定期考査、学期末の成績処理、高校入試の多忙期は避けたいという事情もある。学部生・院生にとっては、逆に土・日はアルバイト、論文作成のための時間として残しておきたい。長期休業中の開催は、現職教員には余裕はあるものの、学部生・院生にとっては帰省、旅行、合宿などの時期と重なる。しかしかなる事情があつたにしても参加したいと思わせるような研究会が求められる。事前に年間予定を示すことで参加者の便宜を図りたい。

3)広報

広報は事前に研究会の日程や研究テーマを知らせる意味で重要である。参加者にとって

都合のつく日程か、興味のあるテーマか、会場へのアクセスなどは参加動機を左右する。特に学部生には担当指導教官からの後押しが大きな参加動機となっている。院生、現職教員は研究会テーマに惹かれてという参加動機が明らかとなっている。広報文では研究テーマの設定、講師の専門性、研究のねらいなどをあらかじめ知らせておく必要がある。

③「学び」の持続性

昨年度の研究レポートでも指摘したが、研究会の印象は非常に重要である。「学び」への意欲は、院生は研究分野や修士論文との関連性からの興味関心、学部4年生・大学院2回生は採用試験への応援と就職後の不安からの支援要請、現職教員は教材研究の充実などの視点が感じられる。参加者の期待に応えられるような研究会の質が問われている点は変わらない。研究会の質は、参加者に提供する専門的知識と教育現場で役に立つ教育技術の伝播に集約される。それゆえに研究テーマの設定と講師の選定は重要な課題となる。研究会を主宰する側はこのよう「学び」への動機と意欲を汲み取る必要がある。

④研究会の組織作りと参加

研究会の組織作りで大切なことは、研究会を運営する側と、研究会の参加者との距離感を縮めるということである。参加者が自分たちの研究会であるという意識が高まれば研究会の活性化につながる。こうした観点から UTS 教育研究会は、昨年度に引き続き、本年度も兵庫教育大学社会系講座の教員との協力のもと、学部生・院生の方に積極的に運営に参画してもらうことにした。研究会の広報や当日の受付業務とともにブログの立ち上げと活動状況の紹介などで大きな役割を担ってもらった。今後は学部生・院生の要望を取り入れ運営方法を改善していくとともに研究会でのテーマ設定に協力を願いたい。

⑤継続的参加者の重要性

UTS 教育研究会では、学部生・院生・一般教員・大学教員が一堂に集い議論し高め合うという研究会のスタイルを作り維持することを大きな目標としている。参加者の研究会への満足度はアンケートより判断すれば高いように思われる。12回すべて参加した院生も出てきている。今後は学部や大学院を今春巣立った卒業生や修了生が引き続き研究会に参加してくれるかどうか大きな関心事である。それこそが研究会の求める「学び続ける教員像」のスタート地点に着くことにつながっていくからである。

4 結論

(1)「学び続ける」教師の原動力とは何か

研究会に講師として来ていただいた方は、前述したように「学び続ける」教師像を考えるにあたってモデルともなる方である。研究会での発表内容、さらに研究会後の交流会を通じて多くの示唆をいただいた。そのような講師の方の共通点をあげると次のようになる。

- ①常に関心のある研究分野を持ち、その分野についての問題意識を持ち続けていること。
すなわち研究の持続性があること。
- ②研究成果や授業実践を発表する場を持っていること。
- ③先達となる指導者に恵まれたこと。

④日々の授業への教材研究や授業実践の積み重ねが専門的研究分野へと発展したこと。そして何よりも教師としての専門性を磨きたいという意欲と情熱が感じられたことである。UTS 教育研究会での講師との交流会の意義は、講師の方々のこうした思いや学問に対する真摯な姿勢を参加した方々に伝えたいという目的があった。研究会にすべて出席された院生はこのような意図をよく理解できたとアンケートで答えている。

(2) 「学ぶこと」から「学び続けること」へのステップ

アンケートの結果から教科指導や学級経営に兵教大の学部・院生は強い関心を持っていることが分かった。教師となり日々の授業への備えとしての教材研究とその実践が積み重ねられ一人前の教師になりたいという願いが感じられる。教育現場での教育実践の積み重ねや関心のある学問分野の専門性が教材研究によってさらに磨かれていくことが期待できる。UTS 教育研究会はこのような教師（学部生・院生）に対して研究発表や教育実践の場を提供するという役割をもっている。すなわち「学ぶ」ことの意味を知った教師が「学び続ける」ための架け橋となる役割である。

研究発表をされる方々の専門性に感化され、教育への情熱に心をうたれ、自らも何か教師としてできないかを模索し、自分自身の研究テーマを持つに至るといった流れが「学び続ける」というステップになると考えたい。

付記

この研究レポートを作成するに当たり、多くの方々にご協力を賜りました。UTS 教育研究会のアンケートにご回答いただいた方、研究会の受付などにご尽力いただいた学部生・院生の方々、「Hyokyo-net」への研究会案内文掲載や兵教大修了生への郵送物などで研究会の広報活動をご支援いただきました兵庫教育大学都道府県連携推進本部・同窓会事務局の皆さま、そして UTS 教育研究会のために講師として素晴らしいご講演をいただきました方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。